



三

『ではお嬢、ではなかつた、あの、お清さん、私はこれで暇しますから、何彼は又皆様方にお聞きなすつて、落度のないやうにね、よござんすかい？』
 此處花村辯護士の宅へ初奉公の清子を伴つた婆やは、幾度となく斯う繰り返しく、薄暗い五疊の間の女中部屋に、しよんぼり坐つた清子の上を氣遣ひながら、さればと云つて何時まで傍に喰附いて居る譯にも行かず、心を残して歸つて行きました。

『ちよいとお前さん幾つなの？』

同じお小間のお宮と云ふのが、てかく油光のした結立らしい頭を氣にして、頻りといぢくりながら傍へ寄つて來ました。

『十六になりました。』顔を赧めて清子が答へますと『まさう！ 随分大柄だね、私初め十八位に思つてたわ、だつてお前さんの服装つたら、随分質素なんだもの。』

何だか人を輕蔑むやうな口吻で、お宮は嫌にしろじろ横眼を使つて、新銘仙の綿入に母様のお譲りの黒縹子と、以前襦袢の袖にしてゐたメリンスをはいで合した清子の帯を見ながら、華美な友禪羽二重に青滋の色縹子を合した自分の帯のお太鼓を、思ひ出したやうにキユツと背高く背負ひあげて、トンと一つ叩くと、今度は華やかな縫模様の半襟を、ルビー入りの指環に飾られた左の手で、ちんまりと掻き合せたのでした。

『お前さんのお家東京？』

「え。」
 「私はね大磯なのよ。私の方ではね、妙な習慣で、どんな好い立派な家の娘でも、それこそ宅では奉公人の四五人も使つてゐるやうな家でもね、年頃になると屹度他人の仲へ出してね、見習奉公つてのをさせるのよ、それできや、お嫁になれないの、ね變でせう、東京の方なんか聞かせたつて、一寸と本當にしないわね、以前お前さんの前に居た方も、家が困つて御奉公に出たやうな風らしかつたわよ。」
 清子はたゞ俯向いて膝ばかり見入つて居ます。
 「私ね、宅から毎月三圓づゝお小使錢を送つて来るの、それから此家で頂くお給金があるわね、だから私、半襟だの何だの始終買つて、みんな費つてしまふのよ、何しろね、此家は御商賣が御商賣でせう、お客様の前へお茶一つ持つて出るにしても、餘りお粗末な服装もしてられないぢやないの、これでお小間となると、お三どんと違つて、同じ御奉公でもかかりがかるわねえ。」

又してもじろく／＼清子の服装を見廻します。粗末な服装を恥ぢると云ふのではないのだけれど、清子は何だかおど／＼して、妙にいちけつたやうな氣分になりました。
 「以前、中野の邸に住まつて居る時分、召使つて居たお小間にしても、仲働きにしても、お宮さんのやうに絹ぐるみの立派な様子こそしては居なかつたけれど、今の私よりは氣の利いた服装をして、少くともその時々流行のものを身につけて居た。それに私にしても同じ使ふなら、身の廻りの小さつぱりして居る方が、汚ないのよりは氣持がよかつた。私とお宮さんと、餘りと云へば對照が酷過ぎる。萬事に華美々々しい御家風では、私はとても旦那様や奥様の御氣に召さないかも知れない——」
 「どうしたの、ひどく考へ込んだわね。」
 「……」
 「ホ、家が戀しいんでせう。」
 「いゝえ。」清子は周章て、頭を振りました。



「ぢやどうしたのよう、何處か御病氣？」
 「いゝえ。」
 「だつて馬鹿に顔色が悪いわよ、どうしたの？ 仰」

「私いつそ御飯焚きをさせて頂けないでせうかと思つて……」
 「アラ嫌だ、御飯焚きなんか下らないわ、それにお安さんてのが一人あるぢやないの、ね、そら馬鹿に癖つ毛の年増の方があつたでせう、あの御飯焚きなの、幾ら此家が大家内だつて、あの一人一人で澤山だわ、お前さん、どうしてそんな事云ひ出すの、お小間は嫌ひ？」
 「いゝえ、だつて私服装が無いんですもの。」
 顔を紅のやうに染めて、やつとの思ひで云つてのけました。
 「さう、だつて可いぢやないの、これから段々お給金で作へて行けば、ね、まさかお給金まで親元へ送らなくても可いんでせう。」
 「……」
 「神田のねメリス屋さんがちよい／＼廻つてね、それは好い柄を持つて来るわよ、お前さん今度メリスで丸帯を一本お拵へなさいよ、幾らもかゝりや

しないわよ。』

氣樂らしいお宮の話を聞くにつけても、思ひ出されるのは、巢鴨の奥の侘住居です。清子は母様を思ひ弟を思ひ、そして思つてもぞつとする獄舎の中に無實の罪に苦しむ父様を思ひ出して、堪らなく悲しくなりました。

——今頃はもう婆やから此家で頂いたお給金を受取つて、母様は差入れ物のお準備にかゝつてらつしやるかも知れない、そして明日は早くから市ヶ谷へ面會にいらつしやるに違ひない、父様は、どんな、どんなお顔をなすつてらつしやるのだらう？ どうがなして無實の罪からお救ひする譯には行かないのか——

『婆や、婆や、おしつこだつてば！』

急にお廊下の彼方で、あわたいしいお子様の聲がする。

『早く、早く、早くつてば婆や！』

『ちよつ！ 又多喜子さんがおしつこだつてさ、あ

の方はこの節遊びに夢中になつて、いよ／＼と云ふ間際になつてあれなんだもの、本當にうるさいつちやありやしないよ。』

お宮が邪慳な調子で云つて、額に皺を寄せました。

『早くつたら、よう早く！』

九つを頭に五人のお子様へ、婆やとお守と二人が附いて居る筈なのですけれど、おしめの離れない小さいのの世話やら、何やら彼やらで、兎角手廻り兼ねる様子です。それに玄關にも三四人書生さんが居るけれど、男の事で一向に奥の用事の間に合はない。

『誰かよう、アーン、アーン、アーン。』

『おや、お泣きなすつてらつしやる！』

清子が立ち上りますと、お宮はおさへるやうに、『およしなさいよ、お子様の方は婆やさんの受持になつてゐるんだから』

『だつて、どなたも出てらつしやらないぢやありませんか。』

『お洗濯でもしてゐるんでせう、今に來るわ。』

『だつて……』

『可んだつてばさ！』

一度私達が手傳へば婆やさん好い氣になつて、すん／＼此方へ用事を廻すわよ、うつちやらかして置く方が可いわ。』

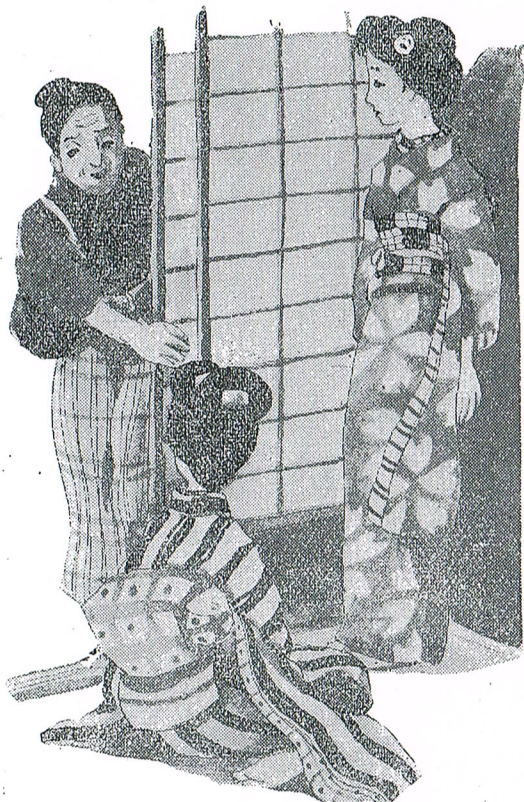
『では婆やさんを呼びませう。』

『うつちやつてお置

きなさいつてば、ちよつ、お前さん 餘程おせつかいだよ。』

不機嫌らしいお宮の手前、清子は強てもお子様のお世話をする譯にも参りません。立つて可いのか、坐つて可いのか、たいもじ／＼壁にもたれかゝつたまゝで立ちました。

『アーン、アーン、アーン。』



泣き聲は一層はげしくなりました。

どたばたお廊下を駆け出す音がして、

『まあね、あんなにお泣きなすつてらつしやるに、若い人達、みんな揃つて鬻なものだか、知らん顔して、人がどんなに忙しいと思ひしてようが

どうしようが、手前達平氣で、喋舌つてさへすれば可いものだか、随分薄情なものだよ。』

女中部屋の前を通りすがりに 越後辯の疳高い聲で、聞えよがしにぶつくさ云つて行きました。

『へん、人の事をつんばだつて、さう云ふ自分こそつんばぢやないか、へんだ！』

小さな聲で云つたお宮の憎口を、婆やは早くも聞

きつけて、「何だつて、今一度云つて御覽」ガラリと障子を開けて、お宮の他に、其處に新規の清子と一緒に居るのを見ると、「何だね、お前さん達、二人も此處で手が明いて居て、あんなにお子様がお泣きになつてゐるに、見ようもしないで、それで可いものかどうだか。」

「一寸とく婆やさん、お小言は後にして、お前さんこそお役目を先に済まして來たら如何？」

「幾らお前さん達お小間だからつて、お子様がお泣きになつてれば、手隙に一寸と位見て呉れたつて、大した罰が當りもすまいに。馬鹿に忙しい思ひしてゐる者があるかと思ふと、遊んでゝお給金の貰へる人もあるし、世は様々なものだよ。」

ちろりと流眼に清子を見返りました。

「本當に氣がつかませんで……」

あるかなきかの聲であやまつて、清子は逃げるやうに其場を外し、お廊下を多喜子さんの方へと急ぎました。

(つゞく)